

会長講演

家族と育ちあう家族看護～家族看護実践の拡大にむけて～

中村 由美子（青森県立保健大学）

家族看護がわが国に紹介され、取り組み始められてから10年以上が過ぎ、看護学分野の中ではまだ若い領域ではあるが、その意義や有用性については認められてきている。1993年にわが国で開催された国際シンポジウムから14年が過ぎ、2007年に開催された8th International Family Nursing Conferenceにおいては、開催国の次に多いメンバーが参加するなど、諸外国からもわが国の家族看護学の発展には大きな期待がもたれている。

看護とは、病める人の幸福(well-being)を追求することが目的であり、その病人に大きな影響を与え、そしてまた、影響を受けている家族をも看護の対象としている。家族看護においては、「一般システム理論」や「家族療法」など、他の学問分野で構築された家族に関する理論枠組みをもとに発展してきている。しかし、それら理論の応用については、まだ吟味すべき点も多いのが実情である。そのため、それら理論を正しく理解し、家族看護学としての独自性を構築していくことが今後のテーマともいえよう。

とはいえ、筆者の専門である小児看護学の立場からみると、現代家族の役割変化は著しく、親役割や職場における男女の役割などの急速な発展が、家族の中心的な機能である子育てに影響し、児童虐待の増加など家族問題の複雑化へと進んできているのは周知のことである。アメリカの家族療法家であるホフマン(Hoffman)は、「人にとっての家族は、魚にとっての水のようなもの」と、家族の重要性と関与することの難しさを語っている。癒しの場としての家族本来の機能が回復できるように、これからの取り組みが期待されている。そして、北米で発展してきた家族看護学は、アジア圏であるわが国の文化背景を踏まえて、より実践的な学問として拡大しはじめている。それらを踏まえ、今後どのように家族看護学をはぐくんでいくのかがこれからの家族看護学での課題といえる。

日本家族看護学会第14回学術集会のメインテーマである「家族と育ちあう家族看護」は、このような背景のもとで、更なる家族看護学の学術的発展と、家族看護の実践能力向上に向けて企画されている。今一度、保健医療の場において一番身近に家族と接する専門家として、どのように家族看護の実践を広げていくかについて考えていきたい。